

眼科手術入門

河野眞一郎 編著

最近まれに見る、大変に親切な、こころの行き届いた眼科手術の入門書である。手術の心構え（皆さん、ついつい忘れていませんか）から始まり、手術環境の整備、消毒などの術前準備、手術の基本手技、基本操作、closed eye surgery の要点、そして麻酔を扱った前半の第1部「手術の基本」が特に優れている。

20～30年前の顕微鏡手術導入期の本には、確かにこのような記載があったが、最近の手術書に、しばしば欠けている部分である。何をやるにしても大切なのは基本である。基礎がしっかりしていないと、いくらやっても大成しない。最近の教育一般を見ても、基本に関する指導が足りないから、礼儀、挨拶などのできないような、変な社会人ができてしまう。基本は、初心者の時に、徹底的に習慣として体で覚えておかねばならない。学会で手術ビデオを見ていると、かなりアドバンストな人で、ここに書かれているような基本手技のできていない人がある。恥ずかしいことであり、悪い癖になっていて、年季の入った人ほど修正が効かない。そのような意味で、中堅の人にも、さっと一度は目を通してもらいたい本でもある。

また、最近の分担執筆になる分厚い手術書と違い、気心の知れた4人という少数の執筆者の手によるためか、全編に手術という医療行為に対する共通の哲学が流れているのが感じ取れる。執筆者の意気がよく合っているからであろう。構成的に見れば、実際的な手術に関する描画が中心で、写真による解説よりはるかにわかりやすい。絵にも無駄がなく、大切な要点だけが的確に伝わるように書かれている。筆者が挿絵画

家と、かなり詳しい打ち合わせを重ね、何度も手直しを加えた結果できた絵なのであろうと、一読した限りでは思ったが、聞くところによるとほとんどの挿絵を筆者自身が描いたという。道理で大変に要領がよい。カラーでなくモノトーンであるのも、筆者の言いたいことを却ってわかりやすく、ストレートに読者に伝えているかもしれない。所々に挿入された、手術に関する考え方を例えた漫画も面白く、印象に残る。埋草の「コラム」も、数行と短いながら、きわめて教訓に富んでいる。

これだけのページ数で、これだけの挿絵数で、これだけの解説文で、手術に関する基本から応用までがまとまってしまうのは、箇条書きの多用、断定的記載、思い切った省略など、編集の妙にある。この本は、全ての眼科医が持っていて決して損のない、きわめて読みやすい眼科手術基本の書である。

特に、入門者は、この本に目を通し、イメージトレーニングをしてから手術室に入って来てもらいたい。手術室を出たら、その日の反省を込めて、もう一度、この本の関係する部分を読み直してもらいたい。そうすれば、漫然とトレーニングを受けている人より、はるかに手術の上達が早いはずである。

大阪赤十字病院 本田孔士

●B5 頁244 2007年

定価 7,350 円（本体 7,000 円＋税 5%）

【ISBN978-4-524-22396-1】 南江堂刊